

## 研ぎ澄まされた縄張りの城

滋賀県立大学教授 中井 均

織田信長亡き後の織田家の跡目相続で柴田勝家と羽柴秀吉は敵対します。そしてついに天正11(1583)年に賤ヶ岳合戦しずがたけがっせんが勃発します。この賤ヶ岳合戦といえば七本槍が著名ですが、実は両軍が2カ月にわたって湖北でにらみ合う対峙戦であったことはほとんど知られていません。余呉の山並みには両軍が構築し、帯陣した陣城と呼ばれる城郭遺構が20カ所以上にわたって残されています。そのなかでもっとも大規模なものが玄蕃尾城です。

越前北ノ庄城を出発した柴田勝家が本陣としたのがこの玄蕃尾城で、その位置は柴田軍の最後尾にあたります。城は内中尾山うちなかおやまと呼ばれる山頂に選地し、眼下には北国街道を望むことができます。注目されるのはその構造です。中心の曲輪くるわとなる本丸の隅部には土壇があり、天守台に相当します。この土壇には礎石が残されており、実際に望楼が建てられていたことがわかります。さらに本丸の周囲には高い土塁と深い横堀が巡らされています。戦国時代の山城では曲輪を階段状に配置して防御しますが、玄蕃尾城では横堀を巡らせることによって完全な遮断線を設定しています。これは近世の城郭を水堀で囲む構造の山城版といってもよいでしょう。

玄蕃尾城の構造の真骨頂はこの中心の曲輪に付属して構えられた曲輪群です。土塁を巡らす角馬出かくうまだしと呼ばれる小曲輪が幾重にも構えられ、敵の直進を妨げています。特に本丸の南方には多くを配置しています。それは秀吉軍に対する正面を意識していることを示しています。一方、北方には本丸よりも広い扇形の曲輪が配置されています。これは勝家の領国の越前からの軍事物資や兵糧へいたんきちを入れ置く兵站基地として構えられたものです。このように玄蕃尾城は大手となる南面と、搦手からめてとなる北面をはっきりと意識して構えた城であることがわかります。もちろん



これらの曲輪は敵を迎え撃つための施設であり、人が駐屯できるのは本丸しかありません。大半の兵は城外で露営をしていたものと考えられます。

さらに戦国時代の山城は自然地形を最大限に利用して築かれた防御施設ですが、玄蕃尾城では設計図をもとに寸法まで計算して築いた城郭といえます。おそらく現地で測量したうえで築いたものと考えられます。賤ヶ岳合戦を目前にして、自然地形を頼りにするのではなく、人智を尽くして設計された縄張りで築かれたのです。玄蕃尾城の研ぎ澄まされた縄張りは戦国時代の築城の到達点を示すものです。

賤ヶ岳合戦では玄蕃尾城と同様に設計図によって築かれたような発達した縄張りの城がいくつも築かれています。そこに布陣して両軍が睨み合って対峙していたのです。柴田勝家も羽柴秀吉も織田信長の旗下として戦ってきた、いわば同門同士の戦いであったわけです。そこで構えられた陣城も同じ築城思想によって築かれたものでした。両軍ともに手の内を知った戦いであり、そこで対峙戦となったのでしょう。その同門の城跡が今も人知れず湖北の山並みに累々と残されているのです。そして玄蕃尾城はその頂点に位置付けできるのです。

中井 均(なかいひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。